研究報告

日本大学医学部における 26 年間の医学教育セミナーとワークショップを振り返って

藤田 之彦¹⁾ 橋本 修^{1, 2)} 竹内 仁³⁾ 相馬 正義⁴⁾
 亀井 聡⁵⁾ 相澤 信⁶⁾ 片山 容一⁷⁾

¹⁾日本大学医学部医学教育企画・推進室

²⁾日本大学医学部内科学系呼吸器内科学分野

³⁾日本大学医学部内科学系血液膠原病内科学分野

⁴⁾日本大学医学部内科学系総合内科学分野

⁵⁾日本大学医学部内科学系神経内科学分野

⁶⁾日本大学医学部機能形態学系生体構造医学分野

⁷⁾日本大学医学部脳神経外科学系脳神経外科学分野

Reflections on Medical Education Seminars and Workshops Over 26 years at Nihon University School of Medicine

Yukihiko FUJITA¹⁾, Shu HASHIMOTO^{1, 2)}, Jin TAKEUCHI³⁾, Masayoshi SOMA⁴⁾,
 Satoshi KAMEI⁵⁾, Shin AIZAWA⁵⁾ and Yoichi KATAYAMA⁷⁾

¹⁾Division of Medical Education Planning and Development, Nihon University School of Medicine

²⁾Division of Respiratory Medicine Department of Internal Medicine, Nihon University School of Medicine

³⁾Division of Hematology and Rheumatology Department of Internal Medicine, Nihon University School of Medicine

⁴⁾Department of General Medicine, Nihon University School of Medicine, Nihon University School of Medicine

⁵⁾Division of Neurology Department of Internal Medicine, Nihon University School of Medicine

⁶⁾Department of Functional Morphology, Nihon University School of Medicine

⁷⁾Department of Neurosurgery, Nihon University School of Medicine

Few studies have been published about faculty medical education seminars and workshops. We retrospectively analyzed 62 workshops and 14 seminars held at Nihon University School of Medicine between 1985 and 2010. During the 26 year period, we had over 1531 participants. The topics, such as problem-based learning methodology, curriculum planning, and multiple-choice question development reflect the current medical education trends in Japan during that period.

Key words: faculty development, medical education workshop, curriculum planning, problem based learning (PBL)-tutorial

ファカルティー・ディベロップメント, 学内教育ワークショップ, カリキュラム・プランニング, PBL-チュートリアル

(J. Nihon Univ. Med. Ass., 2012; 71 (3): 184–189)

要旨 本学の医学教育セミナーとワークショップ (WS) は, 1985 年に第 1 回が開催され 2010 年度までで第 76 回となった。学内 WS を詳細に検討した報告は殆どない。26 年間のセミナー (講演) と WS 参加数は 1,531 名以上 (平均 20 名/回), 講演は合計 14 回, テーマは, PBL 関連 29 回, カリキュラム・プランニング 23 回, 試験問題 (MCQ) の作り方 13 回, などであった。本学 WS の歴史は, 我が国の医学教育の潮流を反映している。

はじめに

わが国で医学教育ワークショップ (WS) が行われたの

は 1974 年 12 月で, これはオーストラリアで行われた世界保健機関 (World Health Organization; WHO) の会議を受けて, 厚生省・文部省科学研究費総合研究班主催, 日本医学教育学会・医学教育振興財団が後援, WHO の後援のもとに富士教育研修所で行われた「医学教育者のためのワークショップ」(富士研 WS) である^{1, 2)}。富士研 WS は 2006 年の第 33 回の医学教育学会の主催を経て, 第 35 回から日本医学教育学会・文部科学省・厚生労働省が共催して実施されている²⁾。各大学における「学内 WS」は, 富士研 WS の修了者が中心となり企画・運営されてきている。

日本における大学単位の医学教育ワークショップの現況に関する最初の報告としては、2001 年の堀内らによる日本医学教育学会のアンケート調査がある³⁾。2007 年には奈良が、全国医学部長病院長会議医学教育委員会・FD 専門委員会として 2003 年度～2005 年度の 3 年間にわたり調査し、全国医学部・病院におけるグループワークを含む学内研修会の現状を報告している⁴⁾。

自校の医学会雑誌に掲載された学内 WS に関する報告は散見されるが⁵⁻⁷⁾、経過を追って調査したものは皆無である。

日本大学医学部医学教育セミナーは、1985 年 12 月に第 1 回が、同 WS は 1988 年 5 月 7 日に初回が開催され、2011 年 3 月まで両者を合わせて第 76 回となった。日本大学医学部での 26 年間にわたる学内医学教育セミナーと WS の記録を振り返るとともに、今後の医学教育 WS の方法と内容を提言したい。

I. 対象ならびに方法

対象期間は、日本大学医学部で第 1 回医学教育セミナーが開催された 1985 年 12 月 (1985 年度) から 2011 年 3 月まで (2010 年度) の 26 年間である。医学教育セミナーと WS 記録は医学部教務課の資料と医学教育企画・推進室の医学教育 WS 報告書に保存されており、この資料を基に開催回数の経年的変化、参加人数の経年的変化、講演テーマ、WS のテーマ別の経年的変化、WS テーマの回数と参加数、problem based learning (PBL)-チュートリアル・チューター養成 WS について紹介する。

II. 結 果

1) 医学教育セミナーと WS のテーマおよび開催回数と参加人数の経年的変化 (Fig. 1, 2)

Fig. 1 に医学教育セミナーと WS 開催回数と参加人数の経年的変化を示した。1988 年から年平均約 2 回の WS を行ってきたが、2005 年から全教員参加による PBL-チュートリアル・チューター養成 WS を行ったため 2006 年には 19 回の WS が行われている。

1987 年までの 3 年間は医学教育 WS 開催の準備期間として医学教育のトピックスをテーマとしたセミナー (講演会) を行い、その後 1996 年まではカリキュラム・プランニングをテーマとした WS のみが開催された。1997 年からは試験問題 (MCQ) の作り方、もう一歩進んだ OSCE (objective structured clinical examination), Comprehensive Exam. の導入、教育技法、クリニカル・クラクシップ、モデル・コア・カリキュラムと共用試験などをテーマに実施した。2005 年からは PBL (problem based learning) チュートリアルの実施に向けてのチューター養成 WS が頻回に組まれた。

最近 10 年以内に行われはセミナー (講演) 参加人数は記載があったが、1987 年までの 3 年間のセミナー参加人数については記載がなかったため、WS 参加人数のみを示した (Fig. 2)。

2) 医学教育セミナーと WS のテーマ別回数と参加人数 (Table 1)

テーマ別のセミナーと WS の開催回数と参加数を Table

Fig. 1 Topics and frequency of medical education seminars and workshops at Nihon University School of Medicine.
↓ : the first education workshop for attending for postgraduate clinical training

Fig. 2 Number of participants at Nihon University School of Medicine medical education seminars and workshops between 1985 and 2010.

Table 1 Nihon University School of Medicine medical education seminar and workshop topics frequency and attendance

テーマ	WS (数)	セミナー (数)	参加人数 (人)
カリキュラム・プランニング	23	0	392
PBL 関連	26	3	764 (57/3 回含む)
試験問題 (MCQ) の作り方	10	3	192 (127/1 回を含まない)
もう一步進んだ OSCE, Comprehensive Exam. の導入	2	0	33
体験学習 / 態度教育	0	2	不明 (記載なし)
WS の導入	0	2	不明 (記載なし)
教育技法	0	1	不明 (記載なし)
入試選抜	0	1	不明 (記載なし)
モデル・コア・カリキュラムと共用試験	0	1	不明 (記載なし)
クリニカルクラークシップ	1	1	23
合 計	62	14	1404 (1531/1 回講演を含む)

MCQ: Multiple choice question development, TF: task force, OSCE: Objective Structured Clinical Examination

1 に示した．テーマは，カリキュラム・プランニングは WS のみで 23 回，PBL 関連は計 29 回（講演 3：以下括弧内は講演回数を示す），試験問題 (MCQ) の作り方 13 回 (3)，もう一步進んだ OSCE, Comprehensive Exam. の導入 2 回，クリニカル・クラークシップは計 2 回 (1) であった．残りは講演会形式のセミナーで，体験学習/態度教育 2 回 (2)，入試選抜 1 (1)，教育技法 1 回 (1)，WS の導入 2 回 (2)，共用試験 1 回 (1) であった．講演を除いた平均 WS 参加数は 20.0 人/回であった．

3) 医学教育 WS における講演 (セミナー) の一覧 (Table 2)

Table 2 に講演形式をとった医学教育 WS のテーマと講演者一覧を示した．最初の 5 回は WS 導入のための講演形式のセミナーであった．PBL-チュートリアル 2 回は講演とタスクフォースとして参加をお願いした．

4) PBL チューター養成 WS の検討 (Fig. 3)

2005 年度から PBL チュートリアルを開始するにあたり，PBL コアタイム担当教員は「全教員が PBL チューター養成 WS を受講していること」を制度化した．その

Table 2 medical education seminars (lecture-style) at Nihon University School of Medicine

日 時	テーマ	講師	所 属
1985 年12月 5 日	1. アメリカ医学教育視察とくに GPEP Report について 2. 富士医学教育ワークショップ参加報告	鈴木 太 堀江孝至	日本大学医学部教授 日本大学医学部助教授
1986 年 1 月30日	体験学習	向井紀二 堀 原一	ハーバード大教授 筑波大学教授
1986 年 7 月 5 日	入試選抜	三宅史郎 櫻井 勇	日本大学医学部長 日本大学医学部教授
1987 年 6 月25日	態度の教育	木戸幸清 橋本信也	日本大学医学部教授 慈恵医科大学教授
1987 年12月 4 日	ワークショップの進め方	姉崎正平	日本大学医学部教授
1997 年 6 月25日	試験問題の作り方	畑尾正彦	日本赤十字武蔵野女子短期大学教授
1997 年10月15日	試験問題の作り方	細田瑳一	日本心臓血圧研究振興会常務理事
1998 年 6 月 3 日	教育技法について	斎藤宣彦	聖マリアンナ医科大学教授
1997 年 5 月26日	クリニカルクラークシップ	神津忠彦	東京女子医大教授
2001 年11月21日	モデル・コア・カリキュラムと共用試験	佐藤達夫	東京医科歯科大学首席学長特別補佐
2005 年 3 月20日	PBL チュートリアル 症例の作り方	福島 統	東京慈恵会医科大学教授
2005 年 4 月10日	PBL チュートリアル 症例の作り方	吉岡俊正	東京女子医科大学教授
2005 年 5 月 8 日	PBL を取り入れた新しいカリキュラムの作成	高橋優三	岐阜大学大学院医学研究科教授
2009 年 5 月19日	試験問題の作り方	澤 充	日本大学教授

(Participants)

Fig. 3 The frequency and participants of Problem-Based Learning (PBL) tutor training.

Problem-Based Learning (PBL) tutor training workshops were held from 2004. PBL-tutor training workshops were held 17 times with 469 all faculty members in 2006.

ため、PBL チューター養成 WS を 2006 年度には 17 回開催した。2010 年度までに合計 29 回 (講演 3 回を含む) 開催し、764 名が参加した。

III. 考 察

一般に FD (Faculty Development) は、高等教育に携わ

Fig. 4 The year-on-year comparisons of medical education seminars and workshops in individual medical schools³⁾.

る教員の職業的能力を高めること (development of professional abilities of faculty members), すなわち「教員の能力開発」あるいはそのための「教員の能力開発プログラム」という意味で使われる。また Faculty には「学部」という意味もあり, FD という言葉には, 更に教育組織としての機能を充実改善すること (development of abilities of educational organization), すなわち「教育組織の機能開発」あるいはそのためのプログラムという意味も付加されている。本稿では FD を学習指導者 (教員) の教育能力開発と定義し, 医学教育セミナーと WS は FD 活動の一つとした。

医学教育においては教員全体を対象とした体系的な教育能力開発が不可欠であり, 平成 10 年 10 月の大学審議会答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について」で提言されたことを受けて, 大学設置基準の中に, FD の実施に関する努力義務規定が設定された。現在, FD の実施は, 大学設置基準の改正により義務化となっている。近年, 各大学医学部において, FD の実施とともに, 学生による授業評価やカリキュラム改革委員会などの教育改革の組織体制が整備されてきている。FD の中心となるのが, 教職員を対象とした学内 WS の開催である¹⁾。

学内 WS は, 1998 年度は, 医科大学 (医学部) の中で開催していない大学が 31 大学, 歯科大学 (歯学部) においては 15 大学であったのが, 1999 年度には, それぞれ 12 大学, 8 大学と半減しており, FD WS の実施について, 年々, その量的拡大が図られていると報告されている^{1,2)}。学内 WS に関する詳細な検討は, 堀内らの行った全国医科大学へのアンケート調査報告がある³⁾。この中

でまず, 先進的な 13 大学が 1980 年までに学内 WS をスタートさせたが, その後全国的な広がりは遅く, 21 年後の 1995 年で 36 大学であったと報告している³⁾。この中で学内ワークショップを修了した教員は, 大学によって差があるが, 全国的にみると 10 ~ 20% と推測している。堀内ら³⁾の論文から 2001 年時点での日本大学における医学教育 WS の状況を考察すると Fig. 4 に示した通りである。本学は比較的早期から医学教育 WS を開始しており, しかもこの時点での開催回数は全国平均の 8.1 回 (範囲 1 ~ 32 回) に対し 32 回と多く医学教育 WS を実施していた。WS の基本であるカリキュラム・プランニングをテーマにした WS の教員の修了者の割合も全国平均の 35.5% (範囲 5 ~ 90%) に対し 45% と高い数値であった。

学内 WS の実施内容については, 教員意識の啓発を図るための講演会の実施などにとどまっている大学や毎年の実施内容が同じでマンネリ化が見受けられる大学もあると報告されている¹⁾。今後, 一層, 各大学における医学教育 WS を含めた FD (faculty development) の実施回数を増やし, 対象範囲も教授以下全教員だけでなく, 事務職員や学生に拡大していきながら, 質的充実を図っていくことが求められる。実際, 本学の WS では, 試験問題 (MCQ) の作り方の WS へは学部教務課の職員も参加しており, またクリニカル・クラークシップ指導者養成 WS へは 5 年次病棟実習中の医学生も参加してきた。このように本学においても医学教育 WS のテーマによって, WS 参加募集を医学生や教務課職員に拡大して実施しており, さらにテーマ毎に募集枠を学生, 研修医, 学部・病院事務職へと拡大をしていくことが全国的な FD

の潮流である。

2007 年度から大学院の設置基準にも FD が義務化となり、次年度からは大学の設置基準にも FD が義務化となった。各大学の FD のために、学内医学教育 WS の果たす役割は極めて大きいものと考えられる。日本大学においても日本大学 FD 推進センターが設置され、全学 FD 委員会が活動し、大学をあげて FD に取り組んでいる⁸⁾。本学の医学教育 WS は、学務委員会内に WS 小委員会が常設され現在は医学教育企画・推進室で担当しているが、さらに FD の充実を進めていく上では、学内に常設の FD 委員会を設置し、恒常的に医学教育の質的向上を図っていくための体制を整える必要がある。

今まで FD では教職員の意識改革を進めることを考えていたが、医学部での PBL-チュートリアルチューター養成 WS のごとく「チューターを担当するためにはチューター養成 WS に参加すること」を制度化することにより FD を促進出来ると考えられている。

富士研 WS ではカリキュラム・プランニングをその基本において現在でも行っている。学内 WS においても同様な基本概念の基にカリキュラム・プランニングを繰り返してきた。しかし、2004 年度からは本学では卒後教育委員会、後に医学生涯教育センターが主催する「臨床研修指導医のための教育 WS」が開始 (Fig. 1 の) された。本学の臨床指導医 WS はカリキュラム・プランニングに多くの時間を割いているため、2 つの WS は本質が全く異なるものであるが、参加者の一部が共通することもあり、主題テーマとしてのカリキュラム・プランニングは実施されなくなった。しかし、この WS への参加者は卒後 7 年目を越えた医師である。学部教員には医師以外の授業を担当する教員も多く、医学教育の基本であるカリキュラム・プランニングのテーマを数年に一度は実施すべきであると考えられた。

学内医学教育 WS は、基本的な WS テーマに加え、各大学の抱える教育的課題の解決を目的とする WS を各大学特有のテーマで開催することが求められる。特に、今日のように医学教育の改革が急テンポに行われている時期こそ、改革への意欲と、教育の原点をしっかりと見つめ直した行動が要求されるものと思われる。

IV. 結論・提言

1) WS のテーマは、カリキュラム・プランニングから始まり、CBT や OSCE, PBL チュートリアルなど我が国

の医学教育の潮流の反映していた。

2) 多数の教員を必要とする新規的教育方略 (例えば、PBL チュートリアル) を採用する場合、短期間に頻回の WS 開催が必要であり、実際に有効であった。全員参加を義務づけた執行部の強い後押しに支えられた短期間集中型の WS は有効である。FD における制度化の有効性が再認識された。

3) 毎年多くの教職員の交代が生じている現状を考慮すると、カリキュラム・プランニングのような基本的なテーマの教育 WS は、最低数年に 1 回の開催が必要である。

4) 医学部において FD を推進するには、学内に常設の FD 委員会を設置し、恒常的に医学教育の質的向上を図る体制を整える必要がある。

謝辞 日本大学医学部における医学教育 WS は、歴代医学部長 (三宅史郎、瀬在幸安、櫻井勇、堀江孝至先生)、学務担当 (北野周作、鈴木太、原田研介、水谷智彦先生)、学務委員会のメンバー、そして本学教務課職員の全面的献身的な協力と支援によって実施されてきたものであり、稿を終えるにあたり深謝申し上げます。また本学の医学教育 WS のために講演いただいた諸先生に御礼申し上げます。

文 献

- 1) 高久文磨、鈴木章夫、赤津晴子、他：21 世紀における医学・歯学教育の改善方策について 学部教育の再構築のために 医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議報告、文部科学賞、平成 13 年 3 月 27 日；17-21.
- 2) 高橋弘明：11 教員指導者養成 FD。医学教育白書 2010 年版 ('07 ~ '10) 日本医学教育学会 / 編集。篠原出版社、東京、2010; 89-91.
- 3) 堀内三郎、尾島昭次。日本における大学単位の医学教育ワークショップの現状 アンケート調査結果報告。医学教育、2001; 33: 3-11.
- 4) 奈良信雄、伊藤雅章、後藤絵英司、齋藤直彦、田中雄二郎、田邊政裕、福島 統、堀内三郎。全国医学部における大学教員研修 (FD) の現状。医学教育、2007; 38: 275-278.
- 5) 松岡 健。第 1 回東京医科大学医学教育ワークショップ報告。東医大誌、1996; 54: 534-541.
- 6) 藤代健太郎。教室 (診療科) 紹介 良き臨床医の育成を目指して。東医大誌、2011; 58: 369-370.
- 7) 岩城 徹。九州大学での医学教育への提言 医学教育の改善へ向けて。福岡医学雑誌、2002; 93 (3): ii-v.
- 8) 日本大学 FD 推進センター。Available from: http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-cente